

コミュニティスクールを活用した和合スタイルの確立を目指して

阿南町立和合小学校

I はじめに

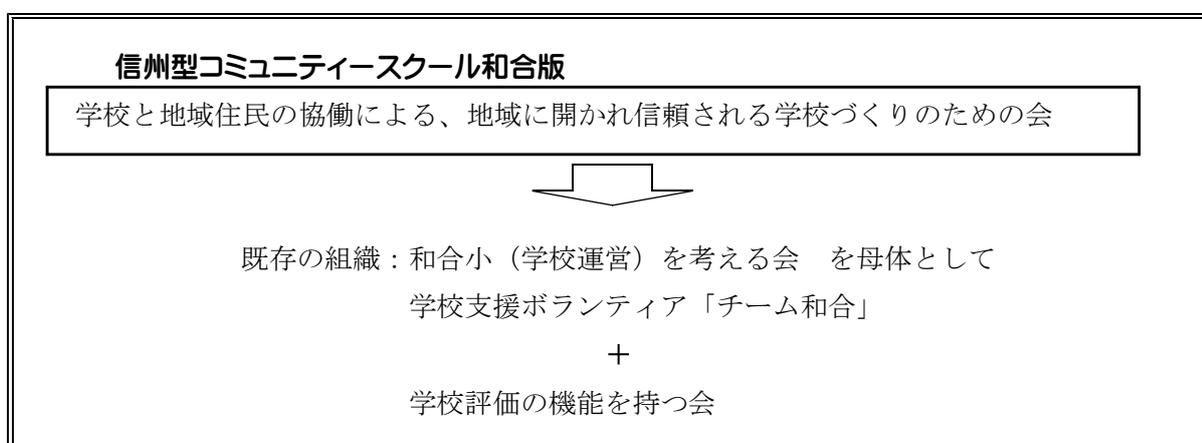
長野県南に位置する阿南町立和合小学校は、29年度、県下最小規模の学校となった。29年度は学級数が2学級となり、前年度より学級減になったため、職員数も3名減となり、4名の職員で子どもたちの教育と学校運営に当たることになった。30年度は3学級になったため、職員数も7名になったがこれから先も急激な児童数増は考えられず、毎年複式学級で2～3学級での学校となるだろう。

しかし、極小規模校であろうとも児童が在籍し、学校として存続しているのであれば、どこの学校にも負けない力を育てていかなければならない。減ってしまった児童数と職員数で、今まで行ってきたすべてのことをやろうとすれば、どこかに無理が出る。

それならば、今まで以上に地域と関わり、地域と一緒に子どもたちの教育に取り組もうと考えた。

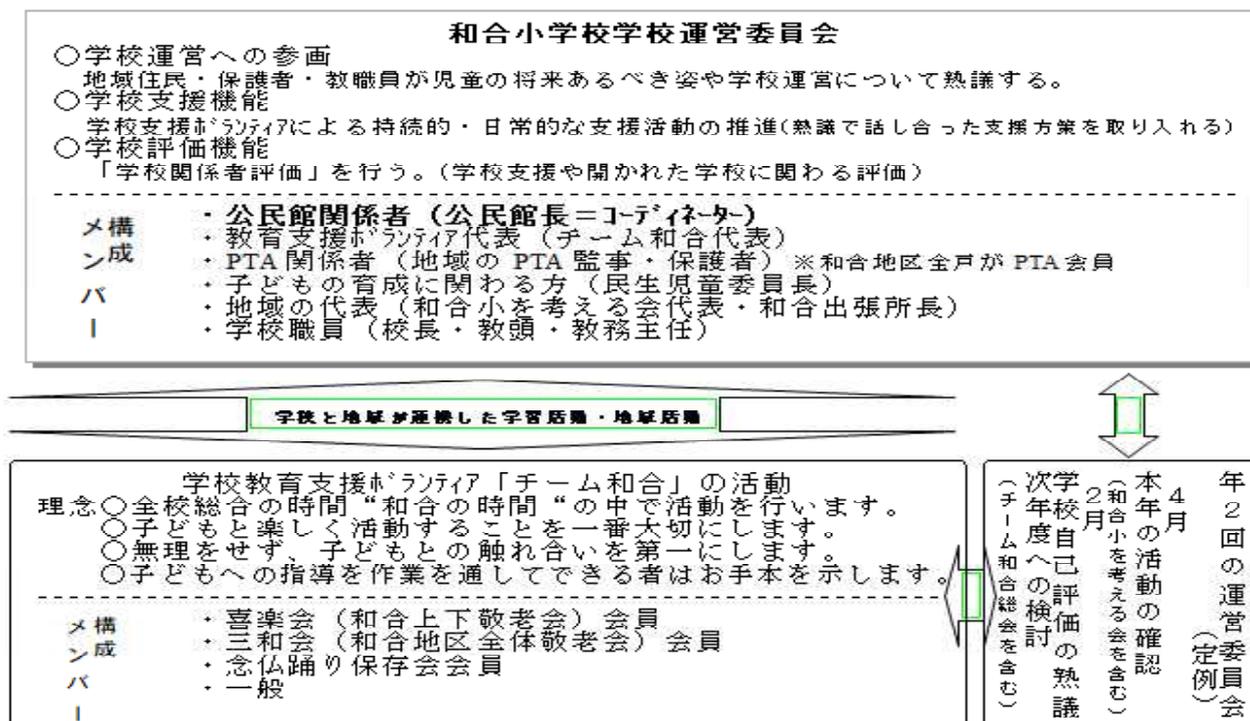
II 本校のコミュニティスクール

1 和合小コミュニティスクールの組織



2 「和合小学校運営委員会」の位置づけ

平成30年度 和合小学校コミュニティスクール



Ⅲ 教育目標と具現のためのコミュニティースクールの関わり

1 学校教育目標と重点目標

かしこく
やさしく
たくましく

和合に学び
たくましく生きる力を
身につける子ども

2 「かしこく」の具現のため

① 地域伝統野菜の栽培

地域を知るために、鈴ヶ沢の伝統野菜 鈴ヶ沢ウリと鈴ヶ沢ナスの苗をいただき、校庭隅の畑で育てた。伝統野菜の保存と継承活動を行っている地域の方に講師としておいでいただいた。学校畑で収穫したウリとナスは、調理してみんなでおおいしくいただいた。地域講師の方も「子どもたちが知り、守って行ってくれると嬉しい。」とのお話をいただいた。



② 昔の通学路探検



郷土の先人：西尾實先生の言葉「山をも坂をも踏み越えよ」を実体験しようと、西尾先生が通った昔の通学路を実際に歩いてみた。

地域の方が子どもたちのために下見を行い、大きな倒木を片付けてくださった。



③ 和合の歴史を知る学習



地域の歴史を知るために、地域の古老をボランティアとしてお招きし、『和合で実際にあった大きな火事』の話を伺った。今しか知らない子どもたちは明治・大正時代にこの地区であった出来事と、その時の人々の協力の様子を知ることができ、驚きとともに地域に対しての愛着が深まったように感じた。これも、地域の古老が講師ボランティアとしてお話をしてくださったおかげだと感じた。

④ 地域の伝統行事



和合地区には、国重要無形民俗文化財に指定されている「和合の念仏踊り」がある。

当日に向けて、また地域に伝わる伝統文化を知るために、学校でも練習を行った。練習には念仏踊り保存会の方々に来てくださった。保存会の方々からは「子どもたちも、念仏踊りを大事にしてほしい。受け継いでほしい。そのためにはいくらでも教えに来る。」というお話をいただいた。保存会の方々も、ボランティア「チーム和合」の一員として学校を支えていただいている。

当日子どもたちは自分達も念仏踊りに参加し、目の前で行われる念仏踊りを毎年繰り返して見て、頭と体で大切な「和合の念仏踊り」を覚えていく。

“花と柳”から笛を吹く人になり、ヒツキ、太鼓の踊り手として成長していく。

これからも大切な「和合の念仏踊り」をしっかりと传承していく。



3 「やさしく」の具現のため

① 自然にやさしく



ふるさとの自然や人々に学ぶ学習は和合小学校の教育活動の大きな柱となる。特に手作業・無農薬にこだわったお米作りは年間を通しての中心活動となる。私たち職員も子どもと一緒に地域の皆様(チーム和合)に支えていただき、学ぶことになる。



収穫した米は、子どもたちが「収穫祭」を企画し、普段からお世話になっている「チーム和合」の方々をお招きして、共に味わい共に喜んだ。

② 学校にやさしく



子どもたちにやさしく

—地区みんながPTA—

本校は地域全戸がPTA会員となり、学校を支えてくださっている。そのため、PTA会費は子どもがいてもいなくても、たとえ老人のひとり暮らしであっても「学校のためなら、子どもたちのためなら」と気持ちよく負担してくださっている。

そして、学校環境整備のためのPTA作業や、子どもたちの活動資金となる資源回収には、地区の方が大勢来て、手伝ってくださる。『子どもたちは地域の宝。子どもたちは地域で育てる。』という思いがある。子どもたちは地区の大人と関わる中で“やさしさ”を学んでいく。



③ 地域の花壇

地域の花壇に花の苗を植えに行く活動も行った。これも、地域の敬老会の皆さんと一緒に活動し、おじいちゃん・おばあちゃん方に教えていただきながら、和気藹々と楽しく活動した。道行く地域の皆さんの目を楽しませることができるよう、また地区が花で彩られて明



るくなるように、との願いを持ち、一生懸命植えることができた。最初、どうやっていいのか戸惑っていた低学年児童も、おばあちゃんたちから懇ろに教えていただいたり、「そうそう、上手だね。」と褒めていただいたり

する中で、生き生きと楽しく活動する姿が見られた。夏を過ぎる頃には、花壇はきれいな花でいっぱいになった。「子どもたちが



一生懸命植えてくれたから・・・。」と敬老会の皆さんが手入れを続けてくださったおかげだと思う。

4 「たくましく」の具現のために

① 和合夏祭り



「いつも人数が少ない中で過ごしている和合小の子どもたちが、たくさん子どもたちとふれあい楽しむ機会を作ってあげたい」という地域の願いから7月に「和合夏祭り」が開催される。学校・公民館・PTAの3者共催で行われるため、学校と地域が話し合い、役割分担をし、計画を練って準備を進めた。当日は和合ならではの川遊び・

巨大流しそうめん・アマゴつかみ・BBQで盛り上がった。地区外からの参加もたくさんあり、賑やかなお祭りとなった。和合の子どもたちも、地区外から参加したたくさん子どもたちと存分にふれあいながら楽しんでいる姿が見られた。

② 和合大運動会

本校の運動会は地区の運動会でもある。もちろん学校としての競技発表も大切に考え、練習も積み重ねてくる。入場行進では、和合小学校として胸を張り入場した。一輪車劇「スイミー」の演技では、拍手大喝采を得た。当日は、地区の種目にもフル出場し、大活躍の子どもたちである。全校児童4人では紅白に分かれ競うこともできないが、地区ごとのチームに分かれ、自分の地区へ所属し競うことで、一日を大満足のうちに終えることができた。自分の所属する地区チームの大人たちや小さい子を一生懸命応援する姿を見て、学校・子どもたち・地域が一つになっていることを実感した。



③ 「チーム和合」に支えられた駅伝大会



阿南町には町主催の駅伝大会があり、町内全体が盛り上がり、大人たちも町内の各学校もそれぞれチームを組んで出場するが、本校は児童全員が出場しても人数不足で1チームを組むことができない。また、本校の子どもたちは走ることが好きで、6年生児童は町内小学生の中では良い記録を持っているが、小学生だけのチームが組めないのが、区間記録などの賞を得ることができない。

そこで、和合小応援団「チーム和合」の大人たちが立ち上がった。

6年生の児童に賞状をとらせるためにはチーム和合の精鋭たちがしっかりと走り、6年生の児童込みの大人チームで入賞しよう・・・。そして、3・4年生の2人のために、走れる人はみんな走ってもう1チーム作ろうと・・・。

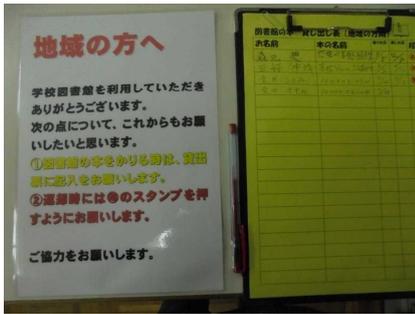
結果は、6年生を交えた『和合1』チームが見事に3位入賞。3・4年生と大人の『和合2』チームも全チームの半ばの成績をおさめることができた。



5 「開かれた学校」づくり

① 地域を呼び込む

敷居を低く「いつでもどなたでもお出でください。」の精神で、図書館の地域開放・体育館の開放・各種児童集会への参加・年6回の学校公開



と地域全戸への周知などを行ってきた。職員室に声をかけ、気軽に図書館を利用し、そのついでに子どもたちに声をかけてくださる方々や、小さな子どもたちを連れ、体育館で遊ばせて、ついでに持ってきたお弁当を給食時に一緒に食べて行かれる方々、児童集会と一緒に参加し盛り上げてくださる方々など、地域が学校にとってとても身近になってきている。

② 地域への「発信」

高齢化が進んでいるこの地域には、学校へ来たくても歩くのがしんどかったり車の運転をしなかったりして、なかなか来られないでいる方も多し

そこで、児童の活動をビデオにまとめ、毎月更新しながら、役場出張所でいつでも誰でも見られるようにした。また、運動会前にはPRビデオを流したり、児童の言葉でアピールするポスターを配布した。地域のお年寄りからは「子ども達の元気が伝わっていいなあ。」と好評を得ている。

IV まとめ

1 コミュニティースクール「和合スタイル」の確立

極小規模校として、少ない職員で頑張ってみたところで学校は成り立たない。地域の力をできるだけお借りし、地域に根付き、地域と共に成り立つ学校にしたい、と願って取り組んできた1年間。改めて地域に支えられていたことが実感できる。

4月の「学校運営委員会」で「極小規模校となってしまう、少ない職員で学校を運営していかなければならない」危機感をお伝えした。その上で、たとえ極小規模校であろうとも都市部の大規模校に負けない力をつける、という学校の教育目標と具現のための理念をお伝えし、家庭と学校と地域が協働で和合小の子どもたちを育てていこう、という確認ができた。

近年職員数が減ったことで、学校だけでは今までやってきた活動もままならなくなったが、反面、コミュニティースクールとして地域のお力を今まで以上にお借りできる一つのきっかけとなり、「和合スタイル」として形がはっきりしてきたように感じる。

2 今までの積み重ねが大成されたコミュニティースクール

極小規模校の存続を考えてきた地域有識者の「和合小を考える会」の存在が大きく、評価機能をそなえた『学校運営委員会』が母体となった。学校を支えてくださるボランティア「チーム和合」は、今までそれぞれの団体や個人で長年学校と関わってくださっていた。コミュニティースクールの立ち上げるに伴い、「チーム和合」として横のつながりができ「チーム和合」の代表者も決めていただけた。学校が支援をお願いしたいときは「チーム和合代表者」に相談すれば良いようになった。また、公民館長がコーディネーターをしてくださっているが、コーディネーターにすべてお任せするのではなく、学校側は教頭が窓口となり、密に相談連絡を取り合っているのも、よりスムーズに運営されている。和合スタイルとしてはこれがベストだと感じる。

3 学校と地域との互恵関係

「和合夏祭り」や「和合大運動会」など、地域と学校が共催で行う行事があり、またこの地域の大きな柱の行事ともなっている。学校があるから、子どもがいるから地域が一つになれるという大きなメリットになっている。また、地域の方からは「子どもと関わることで元気になれる。」「子どもに教えることは楽しみでもある。」などの声をいただいている。特に『和合念仏踊り』は、子どもたちは伝統文化の担い手として期待されている。

4 今後に残された課題

地域全体の高齢化が進んでおり、昨年「チーム和合」としてご指導くださった方が今年もう動けなかったり、地域から出て行かれてしまったりしている。特に歴史や地域文化の伝承を教えていただける方が限られてきてしまっていることが課題となる。

しかし、保護者が全員「チーム和合」メンバーとして支えてくださっていたり、子どもが卒業した後も「チーム和合」のメンバーに残ってくださるなど、若い力で学校と地域を支え盛り上げていこうとする動きがあり、学校としても（職員も）できることは一緒になって行っていこうとする意識になっている。